

アクティブラーニング

動き出す学校と先生たちの実践レポート

AL型授業への挑戦

主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニングの視点からの授業改善：以下「AL型授業」）が、全国で多くの学校や先生方により実践されています。各教科の特性を活かしながらもAL型授業の形や、学校としての取り組み方にもさまざまな形が見られるようになってきました。それぞれの現場で試行錯誤が続けられるなか、若手の研修主任の先生を中心に教員のコミュニティをつくり取り組んでいる、葦山高校の事例をご紹介します。

取材・文／長島佳子 撮影／中村正夫(スタジオ シークエンス)



第8回 葦山高校(静岡・県立)

School Data

1873年創立／全日制普通科、理数科／生徒数851人(男子467人、女子384人)／進路状況(2015年度実績)大学233人、進学準備50人



「時代と地域が本校に求める資質と能力を生徒につけなければならない」と語る櫻井校長。

葦山高校には、早くから個人としてAL型授業に取り組んできた先生もいるが、2015年の高梨文憲副校長の着任で学校組織としての取り組みが始まり、2016年の櫻井祥行校長の着任によって授業改革に拍車がかかっている。同校の特徴は、「授業によって生徒が目標としている力を実践につけられているか」を正しく評価しようとしているところにある。

ループリットクを導入し
生徒の多様な学びを評価

授業形態の改善にとどまらず
「評価」に注目し、生徒の成長を
ループリットクで多面的に捉える

成果を見極めて次につなげていくために、評価に注目してはどうかと。前任校でループリットク評価を研究していましたが、本校でも若手の美那川先生が個人的に始めていることを知り、彼を中心に授業改革を進めることとなりました(高梨副校長)

ループリットクとは生徒が到達すべき目標と評価基準を具体的・段階的に記述した上で、達成度を多角的に評価する方法だ。美那川雄一先生は教壇に立ちながら大学での研究を続け、自身の世界史の授業に5年前からループリットクを取り入れていた。

「自分の授業だけでなく『葦山高校の3年間で身につけること』を見通したループリットクを作成し、生徒の多様な学びや能力を評価していくことになりました(美那川先生)」

SAPと個々の教員による
カリキュラムマネジメント

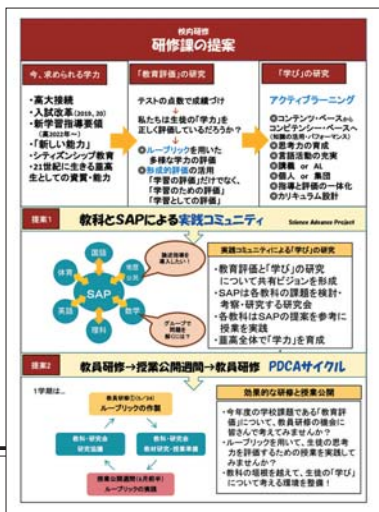
同校は2015年に静岡県の事業

SAPメンバーの先生方



(上段左から) 金親雅史先生、塩谷陽一先生、美那川雄一先生、武井淳先生
(下段左から) 古瀬裕也先生、高梨文憲副校長、櫻井祥行校長、黒津真弓先生、

図1 SAPの取り組みの全体像



であるサイエンス・アドバンススクールに指定されたときから、教員研修など授業改革に着手していったが、櫻井校長の赴任とともに、学びの研究会・SAP(サイエンス・アドバンス・プロジェクト)を組織した。美那川先生を研修主任とし、各教科の中で先進的な取り組みをしている教員6名を選出。美那川先生が設計した取り組みの提

ダウンロード可

高梨副校長は「改革を始めてから教員同士の授業についての雑談が増えた」と感じている。



「校長と副校長が教員の学びの場をつくってくれるからこそできる改革」と美那川先生は語る。

葦山高校のアクティブラーニング型授業への取り組みの歩み



地歴科の鈴木映司先生など、個々の教員が個人的な活動としてAL型授業やルーブリック評価を取り入れていた。

生徒が作成した学校新聞でも「アクティブラーニング」について記事にしていた。

2015年
4月

高梨先生が副校長として着任。将来的にSSHを目指したいと考えるなか、それまでにできる授業改革について検討。美那川先生が個人でルーブリックを取り入れた授業活動をしていたため、美那川先生を中心に改革を進めることに。

同年5月

静岡県の「サイエンス・アドバンススクール」の指定を受け、教員の外部研修や、外部講師を招いたり、生徒が外に出る特別授業などを実施。

2016年
4月

櫻井先生が校長として着任。学校の特長を「授業の葦山」とし、授業改革を本格化。各教科の課題を検討する研究会・SAP (Science Advance Project) に6名の教員を指名。

同年6月

SAPメンバーによる公開授業



同年8月

教員研修会実施



同年9月

全教員対象の研究授業（公開授業）実施

同年9月

指導主事を招いての研修会実施

また、従来の講義型のあるべきです」(美那川先生)

「公立高校も黙っていれば生徒が集まる時代ではありません。『葦山に入ったらどんな人間を育ててくれるのか。そのためにどんな授業をしているのか』を地域に示さなければなりません。もちろん進学校として、大学に入るまでのプロセスを示すということにもなりません」(櫻井校長)

「授業の葦山」を目指し全教員が授業改革に取り組む

授業を否定せず、生徒の3年間を見通したときに、どのタイミングでどんな授業をすればよいか、一人ひとりの教員がカリキュラムを設計できるところを目指している。授業やルーブリックの策定に際し、授業研究会を実施しながら、常にPDCAサイクルを回して改善していくことも明記している。現場から学校全体でのカリキュラムマネジメントを活かしたAL型授業を実践しているのだ。

そのために、校長は「授業の葦山」と標榜し、教員全体に授業改革を意識づけている。学校全体での取り組みを始めてまだ1年に満たないが、9月に実施した公開授業では、参加人数が6月の倍以上となるなど、教員の意識は着実に変わり始めている。生徒の変化は、授業の振り返りシートとして各教科で導入されているルーブリック表に顕著に見られる。例えば数学で、その日の演習問題を解く手順を分解して段階化し、「どこま

で理解できたか」を書かせている。1学期は予めプリントに印刷された段階に対し、自己評価だけ記入していたものを、2学期からはすべて空欄の表にして(図2)、生徒自身に段階も作成させている(次ページでその授業の様子をレポート)。生徒たちがその時間に何を身につけるべきか、目標を理解している証拠だ。

「教員も生徒もこの半年で変わってきていると実感しています。完成形はありませんし、我々教員も生徒同様に『解のない問い』を続けなければなりません。目指すコミュニティの風土に近づきつつあると思います」(美那川先生)

図2

演習 チェックシート	時期	担当	指導主事
1			
2			
3			
4			
5			
6			
7			
8			
9			
10			
11			
12			
13			
14			
15			
16			
17			
18			
19			
20			
21			
22			
23			
24			
25			
26			
27			
28			
29			
30			
31			
32			
33			
34			
35			
36			
37			
38			
39			
40			
41			
42			
43			
44			
45			
46			
47			
48			
49			
50			
51			
52			
53			
54			
55			
56			
57			
58			
59			
60			
61			
62			
63			
64			
65			
66			
67			
68			
69			
70			
71			
72			
73			
74			
75			
76			
77			
78			
79			
80			
81			
82			
83			
84			
85			
86			
87			
88			
89			
90			
91			
92			
93			
94			
95			
96			
97			
98			
99			
100			

数学で使われている生徒自身が自己評価するルーブリック(振り返りのチェックシート)。右が予め段階が記入された1学期用、左が生徒自身が内容も記入する2学期用。

次ページにつづく

教職歴23年
古瀬裕也先生



数学(3学年)

大学で教員免許を取得した後、東京大学大学院で数学を研究。1994年静岡東高校に初任。その後、沼津城北高校、伊豆中央高校を経て、2016年に菫山高校に着任。教員としてのモットーは「あまり教えないこと」。

ひらめきに左右されがちな数学で、
理解の段階を意識させたい！



自分がどこまでわかったか
問いを分解して進めていく

3学年担当の古瀬裕也先生の授業は、先生が用意したプリントの演習が中心だ。演習を解く過程で、生徒たちはその都度隣同士で相談したり、相手に自分の解き方を説明したりしている。そして、生徒たちの机をよく見ると、演習を解くノートとは別に、「チェックシート」(前ページ・図2の左)を書いている。自分がどこまで理解しているか、設問を解く段階ごとに記入していることに驚きを禁じ得なかった。答えが出せなかった生徒にも、なぜそんなことができるのだろうか？

古瀬先生の説明には「手順」という言葉がよく出てくる。公式や基本的な法則を教えるだけでなく、「一つひとつの設問を解く」「手順段階」を生徒に意識させている。それをチェックシートに自ら記入することにより、どこでつまづいて進めなくなったのか生徒自身がわかり、古瀬先生にも伝わるようになるのだ。

家庭学習したくなるのは
「やり直そう」と思う授業

古瀬先生がこのルーブリック形式のチェックシートを使用し始めたのは、同校に着任した今年が初めてだ。



設問ごとに隣や前後の仲間と、解き方を共有して、自分とは違う着目点に気づく生徒たち。

つまづいた生徒のまわりに仲間が集まって、教え合う姿も多々見られた。



「前任校では教務主任としてA-L型授業を推進する立場でしたが、A-Lの捉え方にもいろいろあり、試行錯誤していました。本校に来て授業改革の柱としてルーブリックがあげられていたため、工夫のひとつとして導入してみたのです」

古瀬先生の「手順」に基づく授業はわかりやすいだけでなく、ルーブリックにも適した授業だ。

「数学はひらめきに左右されがちな学問ですが、それでは数学のおもしろさを広められません。しかし、手順を追っていけば、誰でもある程度は理解できると思っただけです」

チェックシートは家庭学習のやる気を起こすきっかけにもなるという。

「生徒にわかりやすい授業が必ずしも成績には結びつきません。わかった気になると生徒は復習しないからで

チェックシートも仲間と共有し、相手がやる気になるようなげましの言葉を書き合う。

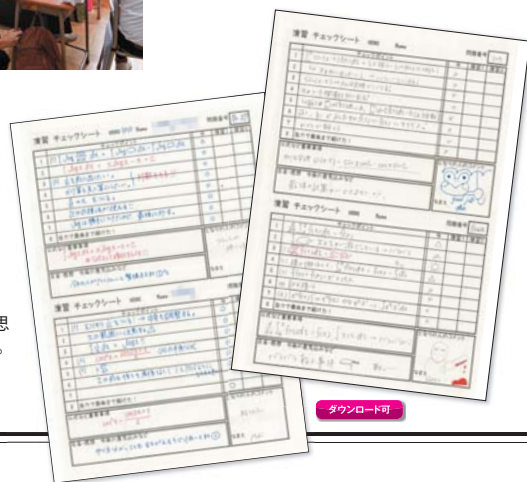
す。家でやり直そうと思うかどうか
が重要で、チェックシートはその際に自分がつまづいたポイントがわかるヒントになります」

現在は、数学科の教員が個別に振り返りシートを作成したり、ジグソー法を取り入れたりしているという。

「今後は教員同士でノウハウを共有し合って、誰がどの学年を担当したときでも、活性化した授業を行えるようにしていきたいですね」



生徒たちは演習に取り組みながら、自分の思考を分解してチェックシートに書き込んでいた。



ダウンロード可